形や色と主体的にかかわる力を培う造形活動

―　知識及び技能の習得を大切にして　―

1　はじめに
2　研究の仮設
3　研究の手だて
4　研究の構想図
5　研究の内容
　(1) 研究の対象
　(2) 授業実践１「わたしの大切な風景」
　(3) 授業実践２「穂波小の校庭から出土した、『ほにわ』」
6　研究のまとめ

第6分科会
美術教育

大島　聖矢（名古屋･明正小）

研究の概要報告

１　今次教研へのとりくみ状況

「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」と「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」の二つの柱のもと、14 本のリポートが発表された。

一つ目「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」では、小学校で、大切な風景への思いを工夫して絵に表す実践と、運動場から出土した「ほにわ」（校名の一部を取って命名、粘土で製作）の実践、多様な交流の場を設定したクランク機構の作品製作の実践などが報告された。この柱の中学校の実践では、自分の思いが詰まった一文字を紙粘土で飛び出す絵文字に表現する実践、今の気持ちや将来の夢を描き込んだ自画像の制作、修学旅行の思い出を平面・半立体、立体のいずれかで奥行きを強調した作品を制作する実践などが報告された。

次の「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」で、小学校では、喜びを感じられる場や振り返る時間を設けた題材を学年で実施し、全校で鑑賞する実践や、グループ活動・ペア活動・全体交流を駆使したオリジナル帽子づくり、ＩＣＴ機器とプログラミングソフトを活用したオリジナルキャラクター作りの実践などが報告された。中学校では、「今のわたし」と「これからのわたし」と題して自分や他者と対話しながら抽象形体を重ねた立体作品、オノマトペと抽象画を組み合わせた制作、描画アプリのアイビスペイントを使用したロゴマーク作りの実践が報告された。

質疑応答・討論は都合 4 回に分けて行われ、各種技法や技能の指導、制作過程の振り返り、デジタル制作におけるアドバイスや交流の方法、ワークシート、マッピングなどが話題となった。

２　今次研究の主な主題

リポート発表・討論の終了後、総括討論が「『美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと』～子どもたちのゆたかな学びのために～」のテーマを掲げて行われた。ただ、初めてのリモート開催による不慣れのためリポート発表が思いのほか延びてしまい短時間とせざるを得ず、ＩＣＴ関連に絞って話し合いがもたれた。内容は情報モラルやその教育、ＩＣＴ機器利用の利点や問題点などであったが、改めて手を使うことの大切さ、デジタルとアナログの使い分け等にも話が及んだ。いずれにせよＩＣＴに関しては美術教育科関係者として、さらなる検討を加えていくことが不可欠である。

美術教育は、畢竟、見る力と的確に表現する力、発想し構想を広げる力を育て、豊かな表現を実現するとともに、美術を愛好する心と生涯にわたって生活に役立てていく態度を養うことを目的とする。そのために我々は今後とも実践を積み重ねて検証し、子どもたちのゆたかな学びと明るい未来のために努力を続けていきたいものである。

報告書のできるまで

第７１次教育研究集会は、10 月 16 日に愛知県産業労働センターで開催された。昨年度に引き続き、「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに各単組が実践リポートを提出した。この報告書は、助言者の先生をはじめ、関係諸先生のご指導とご協力を得て作成したものである。

助　　言　　者	磯部　洋司（愛知教育大学）	村田　俊広（知教連・武豊中）
教育課程研究委員	榊原　慧太（豊川・一宮中）	秋田　英彦（名古屋・菊住小）
	森田　弥生（西春・新川中）	森岡　隆大（名古屋・白山中）
	石原　正悟（尾北・門弟山小）	小林　佳奈子（小牧・応時中）
	近藤　亘（豊橋・南部中）	三浦　英生（刈谷・依佐美中）

１　はじめに

Society5.0 の時代と言われ、人間の仕事の多くが AI に奪われると言われている。これからの時代を、より人間らしく、より自分らしく生き抜くために、育むべき力は何か。私は、人生がより楽しく、豊かなものになるように、図画工作科の学習を通して、形や色と主体的にかかわり続ける力を育成したいと考える。

目の前の子どもたちには、造形的な知識をもとに、発想を広げられない姿や、思い通り表現できずに悔しがる姿が見られた。造形的な知識や技能を確かに身に付け、それらを豊かに発揮することができれば、思いを膨らませ、のびのびと表現できるのではないかと考えた。

そこで、造形的な視点や表現方法など、発想や表現の幅を広げるきっかけとなるものを、子どもたちにさまざま示していく。それらのきっかけから、取捨選択したり試行錯誤したりして、創意工夫し、表現をすることができるようにする。造形活動が「楽しい」「好きだ」「少し得意かも？」という喜びや実感を、十分に味わうことで、今後の人生において、形や色と主体的にかかわり続けるための素地を培うことができると考える。

２　研究の仮説

造形的な視点や表現方法など、造形的な知識や技能を確かに身に付け、それらを豊かに発揮することができれば、つくりだす喜びや実感を十分に味わい、形や色と主体的にかかわることができるであろう。

３　研究の手だて

①　造形的な知識や技能の確かな習得をめざした、視点や資料の提示

②　発想・構想から表現、鑑賞までの題材の歩みを視覚化し、自己調整力の育成や個別支援の充実、達成感の拡大をはかるワークシートの活用

４　研究の構想図

5　研究の実際

(1) 研究の対象　名古屋市立穂波小学校　第６学年１組　33 人

(2) 授業実践１ **「わたしの大切な風景」**

①　題材について

身の回りに広がる日常の風景や、心を奪われたあの場所の風景…その風景に対する自分の思いが伝わるように、工夫しながら絵に表し、互いの作品から、大切にしたい思いやよさを感じ取る題材である。

まず、発想や表現の幅を広げるポイントをさまざま示し、それらをヒントとして取捨選択させることで、想像を豊かに膨らませたいと考えた。そして、自分の思いを表現することができるよう、描く段階ごとに、順序やコツなどを示す資料を提示した。

【資料１　完成作品】

②　活動の様子

活動ア　大切に思う風景を見付け、表したい思いを明確にする。

教科書の参考作品から、思いを効果的に表すために、描く「目線」に意識するとよいことに気付くことができた。

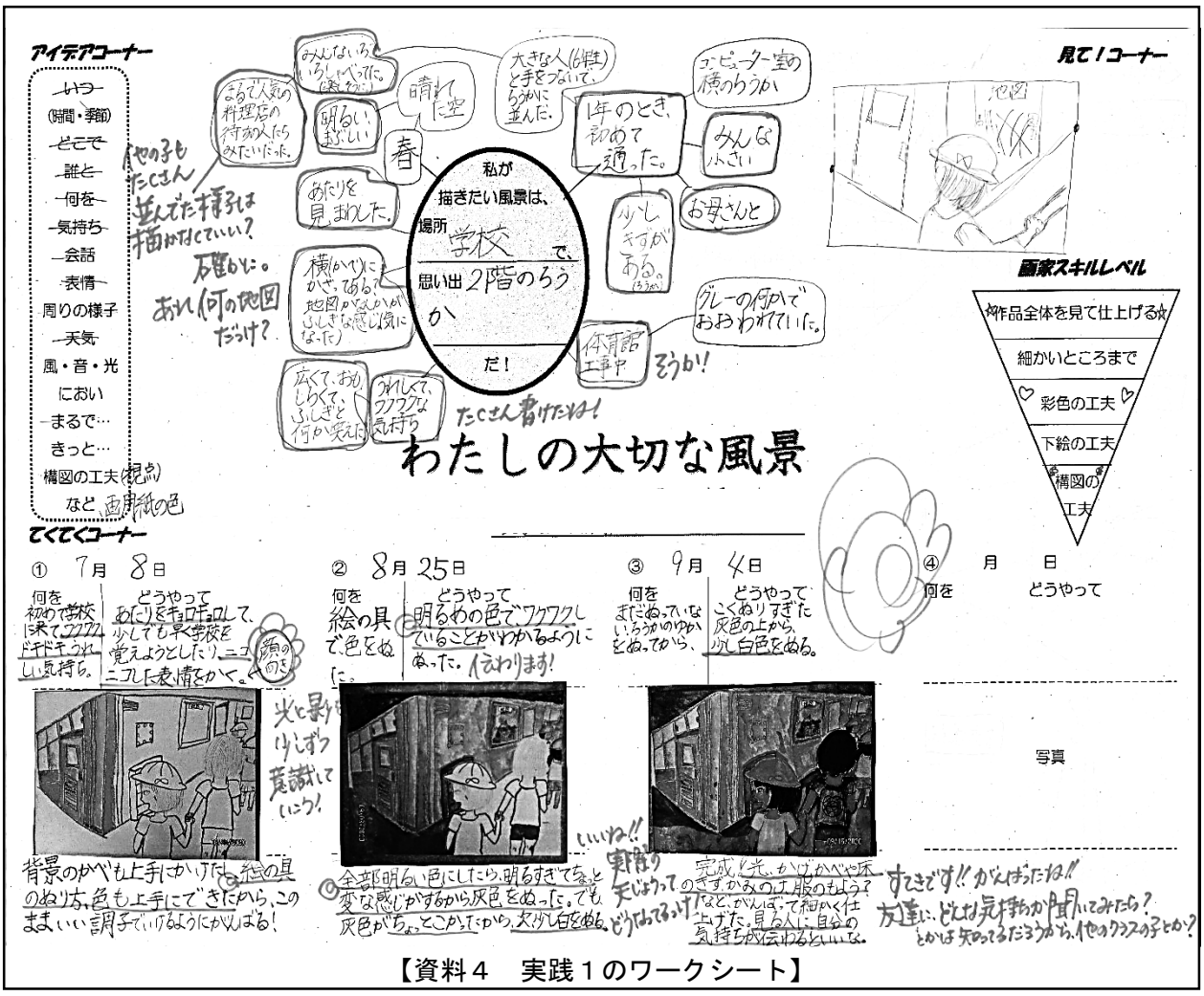
校内の風景を描きたいと考えた子どもも多かったが、「自宅のベランダから見た夕陽」「家族で旅行した時の景色」など、校外の風景を大切に思う子どももいた。よって、校内に限定せず、校外の風景を描く場合は、参考にできる資料を持参させた。画用紙を切ってつくった手作りのスケールで風景を切り取り、目線の高さを工夫して、構図を考えていた。

ワークシートの「アイデアコーナー」で、「時間」や「季節」、「気持ち」や「表情」、「天気」や「光」などのヒントを示し、その中から取捨選択して、思い返すことができるようにした。

表したい思いを深めた後、ワークシートの右端に構図を考えさせた。

【資料２ 手作りのスケールで風景を切り取る子どもの様子】

【資料３ 持参した資料を参考にして下絵を描く子どもの様子】

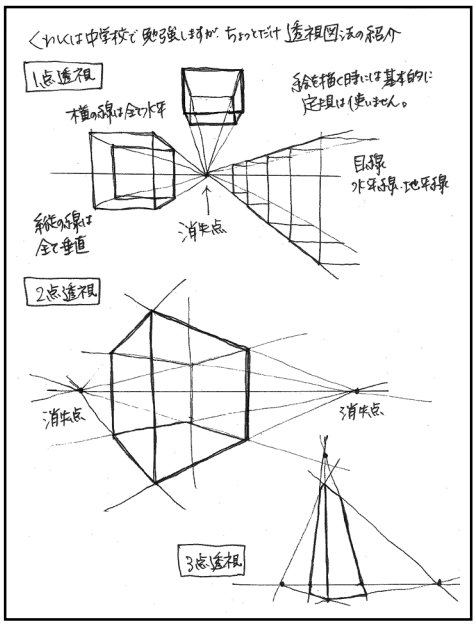


【資料４　実践１のワークシート】

活動イ　大切な風景に対する自分の思いが表れるように、工夫して下絵を描く。

【資料５　下絵を描くコツを示した資料や視点と、それを友だちと見る子どもの様子】

下絵を描き始める段階では、順を追って描き方を示した４枚の資料を提示した。下絵段階でのコツ（気持ち、見る視点、配置、大きさ、向き、重なり、奥行き、バランスなど）をカードで示した。また、ワークシートの裏面で透視図法を紹介し、遠近感を表す方法を伝えた。「立体的に見え

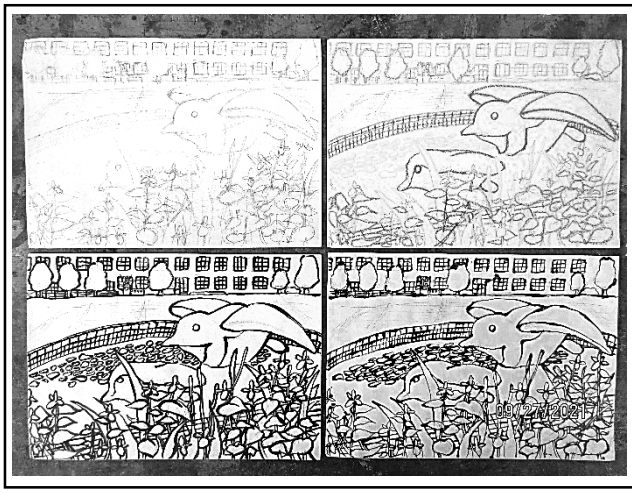


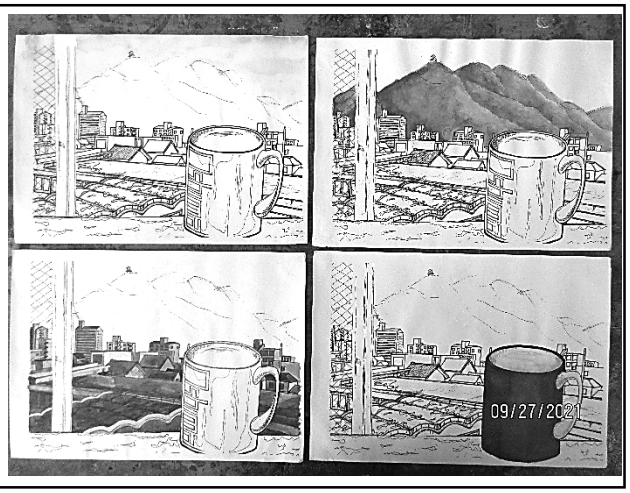
る」と高揚していたが、描かせてみると難しく、発達段階に合わせた指導の必要性を痛感した。

思いを効果的に表すために、木を増やしたり減らしたりするなど、実際の形や色に少し変化を加えたり、コンピュータ室や図書室で資料を探したりしていた。

下絵の線を油性ペンでなぞるか、クレヨンや筆ペンでなぞるか、もしくはなぞらずに彩色するか、参考にできる資料を提示すると、「温かい感じがするからクレヨンにしよう」「筆ペンの雰囲気が気に入ったから試してみよう」と、取捨選択していた。

左上【資料６　ワークシートの裏面で紹介した透視図法】
左下【資料７　下絵の線を何でなぞるかを示した資料】
右下【資料８　どこから彩色していくとよいかを示した資料】





活動ウ　大切な風景に対する自分の思いが表れるように、工夫して彩色する。

画面手前の主張したいものか、画面奥の空からか、どちらから彩色していくとよいか、資料をもとに話し合った。色の「重なり」や「濃さ」の視点から、画面の奥のものや淡いものから彩色していくとよいと考えるようになった。また、彩色段階でのコツ（気持ち、色、重なり、奥行き、光、影、雰囲気、バランスなど）を示した。

思いを効果的に表すために、点描やドライブラシなどの表現技法や、バチック、ドリッピング、コラージュなどのモダンテクニックを提示し、試行錯

【資料９　絵の具を用いた表現技法を示した資料】

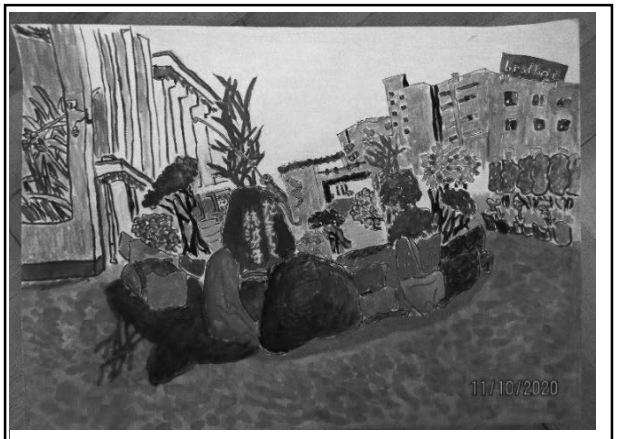
誤を促した。木の葉や芝生、桜の花びらを点描で表す姿や、「中庭の池をマーブリングで表そうかな？」と話し、友だちと一緒に試す姿がみられた。

ワークシートの「てくてくコーナー」に、「今日、『何を（どんな思いを)』『どのように（どんな視点をもとに)』工夫して表していくか」を記述させ、製作過程の写真とともに、それぞれの題材の歩みを視覚化した。子どもたちそれぞれが自らの課題を明確にもち、課題を表せるように試行錯誤し、振り返りをさらなる課題へとつなげていくことで、学びの自己調整力の育成をはかるとともに、個別の技能支援を充実した。「アイデアコーナー」で、ヒントをもとに発想を広げた後、どんな思いをどのように表していくのか、服や壁、床の「模様」や「明暗」などの視点をもとに、発想や構想をさらに膨らませることができた子どももいた。しかし、彩色段階で新たに示した視点（色、重なり、奥行き、影、バランスなど）をもとに、明確な課題を立てたり、積極的に試行錯誤したりすることができなかった子どももいた。さらなる個別支援や、ワークシートの構成を見直す必要性を感じた。

子どもたちの描く様子や作品を見ると、表したい思いをもち、構図、下絵、彩色の各段階で個々に工夫しながら、個性を表すことができていた。

活動エ　校内に展示して鑑賞する。

「手前の地面や岩にいろんな色を重ねていてきれいで、奥行きを感じる」、「建物や地面に影があるから立体的」など、造形的な視点をもとに鑑賞することができた。鑑賞の前にもポイントとして示したが、製作の各段階で意識させてきたことで、造形的な視点を「知識」として習得しつつあることが感じられた。



【資料１０　完成作品「がんばり山」】

【資料１１　完成作品】

【資料１２　完成作品】

③　分析・考察

○　下絵の描き方、なぞる方法、彩色の仕方などの資料提示により、画面全体を見ながら薄い線で構図を考えたり、淡い色から順に重ねたりすることができた。

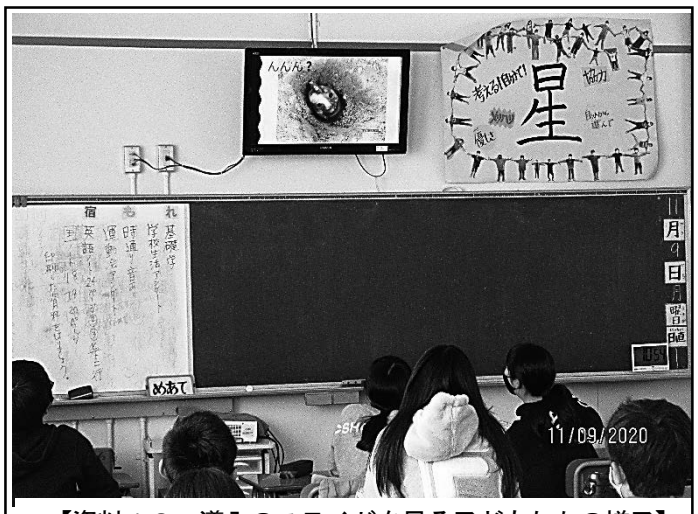
●　提示した資料の細かさや、示した視点の多さが、子どもたちを混乱させたり、「本物みたいに描きたい」という思いを強めたりしてしまい、表現が慎重になってしまった。視点を精選し、のびのびと思い切り、楽しんで表現させたい。

△　ワークシートの活用によって、個々の思いや活動の様子を把握し、個別に支援することができた。しかし、ワークシートを介した対話は深められなかった。

(3) 授業実践２**「穂波小の校庭から出土した、『ほにわ』」**

①　題材について

前任校は昨年度、創立 70 周年を迎えた。運動場の改修工事も行った。「穂波小の運動場から、何やらたくさん出土したよ！ 埴輪？ いや、これは**穂**波小の校**庭**から出土した新種の『**ほにわ**』だ！ 『ほにわ』って何だ？ どんな形だ？ どんな思いや願いが込められているんだ？」と、紙芝居形式で投げ掛けた。思いや願いを込めた自分だけの「ほにわ」を製作し、運動場で焼成した。



【資料１３　導入のスライドを見る子どもたちの様子】

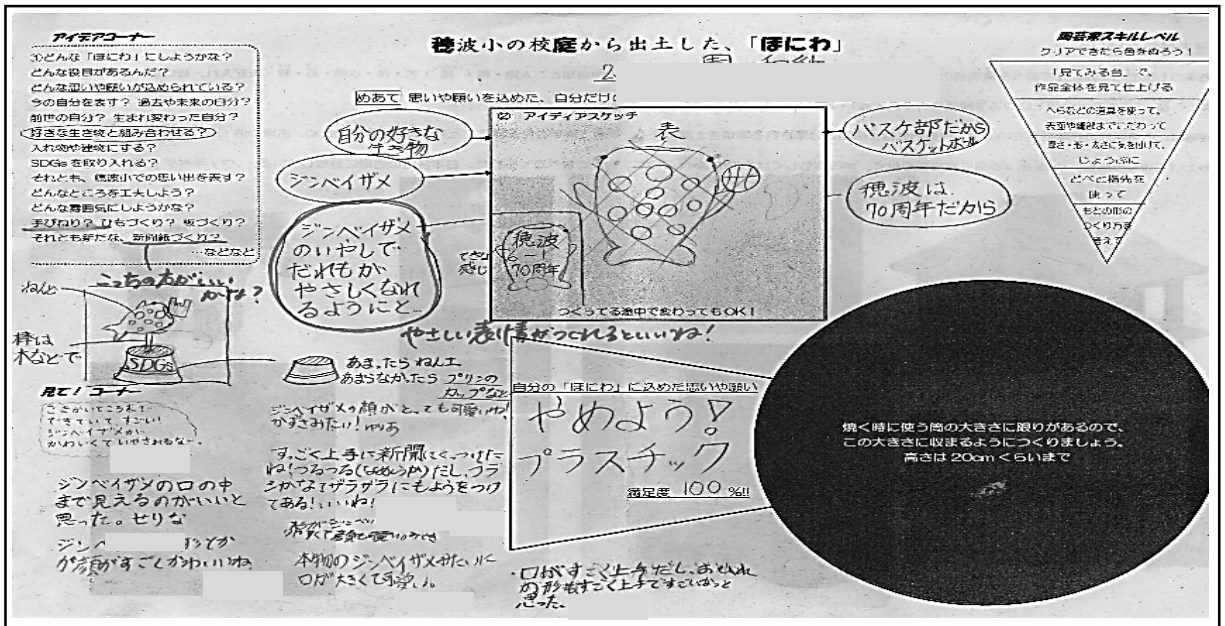
発想・構想のヒントをさまざま提示するとともに、表現方法を資料提示し、個別支援していく。卒業まで半年と迫る中、自らの手でつくって焼成し、校内に展示して多くの人に見てもらうことで、思い出深い経験になる題材である。

②　活動の様子

<u>活動ア　表したい「ほにわ」の形や、込めたい思いや願いを明確にする。</u>

紙芝居調のスライドで題材と出会い、教員が発掘した「ほにわ」を実際に見せることで、表現への意味や価値を見出すことができるようにした。「楽しそう！」「どんな『ほにわ』にしようかな？」と、ワクワク感を抱いていた。

ワークシートの「アイデアコーナー」で、発想・構想のヒントとなる視点を示し、また裏面に、埴輪の役割や写真を紹介して、取捨選択を促した。表したい思いや願いを明確にし、アイデアスケッチを描いていた。



【資料１４　実践２のワークシート】

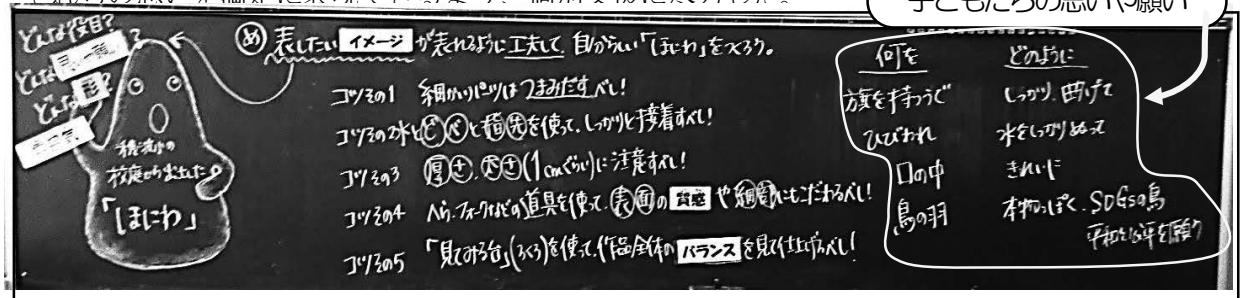
活動イ　イメージを工夫して表す。

４種類の成形技法（ひもづくり、板づくり、手びねり、丸めた新聞紙を芯材にする）の見本を提示し、特徴を伝えた。また、個々が構想した形と成形技法をワークシートで把握した。子どもたちは、つくりたい「ほにわ」の形に合った成形技法を選び、つくっていくことができた。

意識させたいコツを精選し、作品の「厚さ」や「太さ」、表面の「質感」、ろくろを使って見る「角度」を変えながら、作品全体の「雰囲気」や「バランス」に意識することを重点的に伝えた。最後に、「何を」「どのように」工夫して、自分らしい「ほにわ」を完成させたいかと教員が尋ねると、「応援団の旗を持つ腕を、しっかりと曲げてつくりたい」や「鳥の羽に平和の願いを込めて、本物みたいに細かくつくりたい」という思いや願いを聞くことができ、子どもたちの発想の豊かな広がりを感じた。

それらの思いを満足に表現できるよう、個別支援に尽力した。

「何を」「どのように」工夫して完成させたいかを発表した、子どもたちの思いや願い



【製作の仕上げ段階での板書】

【資料１５ 道具を使って一生懸命表す子どもの様子】

【資料１６ 全体のバランスを見て仕上げる子どもの様子】

【資料１７　完成作品（焼成前）】

【資料１８　完成作品（焼成前）】

「家族の健康」や「世界の平和」など、子どもたちの思いや願いがつまった作品が完成した。

活動ウ　校内に展示して鑑賞する。

運動場で焼成した後、友だちと校内の好きな場所に作品を並べて、鑑賞した。実際に土の中に埋めて、発掘を楽しみながら鑑賞する子どもたちもいた。

その後教室で、発想・構想で使ったワークシートの上に作品を置き、コメントを記入し合った。

【資料１９　完成作品（焼成後）】

【資料２０　作品を校庭に埋めて鑑賞する様子】

【資料２１　ワークシートを使って鑑賞する様子】

題材を通して一枚のワークシートを活用したことで、作品と、込められた思い、アイデアスケッチとを並べて鑑賞することができ、作者のこだわりや、思いの変容が鑑賞者によく伝わった。題材を通した自身の歩みを振り返ることで、達成感や喜びを味わうことができたと考える。

③　分析・考察

○　発想･構想のヒントとなる視点は最大限に示し､表現のコツは最小限に精選したことで、子どもたちは思いを大切に、のびのびと表現することができた。

○　成形技法の資料提示と個別支援により、表現方法に迷う姿は見られなかった。

●　焼成に適した「形」や「太さ」､「厚み」などを徹底した結果、手足や牙、トゲや羽毛など、突出した形や細かい飾りを避け、表現や発想の幅を広げられない姿がみられた。

６　研究のまとめ

豊かな発想・構想につながるヒントを視点として与え、表現するときのコツやポイントを示すことで、「できた！」「楽しい！」という達成感や喜びを味わわせることができた。発想・構想を広げるための視点は最大限に示し、順序やコツなどを示す資料や視点の提示は必要最小限に精選することで、子どもたちは、自身の思いを大切に取捨選択し、試行錯誤しながら、のびのびと表現することができるということがわかった。子どもたちの発想や表現の幅を十分に広げるために、どんな視点や資料を提示するとよいか、今後も熟慮していきたい。

また、発想・構想から表現、鑑賞までの題材の歩みを視覚化するワークシートの活用によって、個々の思いや活動の様子を把握し、個別支援を充実することができた。終末鑑賞で、作品とワークシートを介して友だちと対話することができただけでなく、「『何を』、『どのように』工夫すると思いが表せるのか」と、今日のめあてをじっくりと考え、活動後に振り返る自己内対話を重ねる中で、記述内容や考えが徐々に具体的になり、学びを自己調整する力の育成につながったと言える。題材の導入から終末までの自身の歩みが「ぎゅっ」と詰まった一枚のワークシートは、作品と同様に大切に思う子どもが多かった。

図工を「好きだ」と感じ、主体的に形や色とかかわる姿が増え、教室や廊下には、丁寧に描かれたアニメの絵や、折り紙、輪飾りが飾られていた。

あふれ返る物や情報に振り回されず、自己や他者にとって本当に意味や価値のある形や色と、主体的にかかわり続ける力を培うことができるよう、今後も研究を続けるとともに、教員自らも形や色を通して、より豊かで楽しい生活を創造していきたい。